

第 33 回国際養蜂会議

—北京で開催—

柳下 重幸
井上 凱夫
鷺野 憲之
野口 耕司

開 会 式

1989 年第 32 回 ブラジル大会に於て 1991 年ユーゴスラビア、次いで 1993 年北京大会が決定されていたが、ユーゴスラビアは、国内事情に依り見送られた経緯があり、日本にとってはアジアの隣人でもある中国での開催という事で参加者も 80 名を越えたと聞き及んでいる。会場となった北京国際会議場は北京の郊外で、1990 年アジア体育大会が開催され、また養蜂会議直前中国大運動会が行なわれた施設と、道路をはさんだ反対側に位置する立派な建物で、入口にはタンポポの花を形どった造形を、水柱ともいえる噴水がつつみこむように噴き上げ、それは見事なものであった(図 1)。会場の設営は、この会議にかける中国の熱気が強く感じられた。アジアで、日本に次いで二度目のこの国際養蜂会議、養蜂博覧会の組織機構は、国際協調委員会、国家組織委員会、会議実行委員会の 3 つの大きな機構に位置付けられ、国際協調委員会のメンバーは、R. ボルネック、(フランス)、S. カンナメラ (イタリア)、C. トンスリー (イギリス)、VA. グビン (ロシア)、ヤオチュンチェン、ゼンジンミン、何れも中国であり、国家組織委員会には、会長に農業省副大臣のジャンヤンミ氏ほかメンバー 13 人で委員会を構成している。第 33 回大会実行委員会は、会長にヤオチュンチェン中国養蜂学会理事長が就任し、総括秘書、副総括秘書の 5 名と他のメンバー 12 名を配置して、会議の進行を円滑に行うための努力がはらわれている。その他に、会議



図 1 会場となった国際会議センター

事務所、科学部門、展覧会部門、財務部門、協議部門が設けられ大会の運営がなされていた。

我々成田出発の一行は、当日受付などの登録に手間取り開会に間に合うかどうか心配であったが、その待ち時間の間の話しに今回の外国からの参加者は、当初 1500 人程度だったものが次第に登録者が増え、当日は 2000 人を越えたということである。コンベンションホールの一階はすでに一杯で、我々は 2 階へ入場したが、2 階も 3 分の 1 程入場者があり、外国よりの参加者 2000 名以上と、中国からの参加者で盛況であった。開会が宣せられ、続いてカンナメラ事務総長のあいさつと続き、いよいよ APIMONDIA のシンボルが中国へと引継がれ、ヤオチュンチェン会長の首にかけられた。日本でもそうであったように開会式の一連の流れの中で最高の盛り上がりを見せるシーンである。引続いてヤオチュンチェン会長の歓迎のあいさつが行なわれた。

「第 33 回国際養蜂会議と、22 回国際養蜂博覧会が中国の北京で開催される事は、中国のすべての養蜂家の喜びと名誉です。養蜂は魅力的ですばらしい仕事です。5000 年以上の栄誉ある文明と、魅力的な美しい国土で中国は、世界からの仲間の到着を楽しみに待っておりました。私は、養蜂の世界的発展を促し、友交が進展するよう、中国北京市に來られた世界各国からのみなさんを、心から暖かくお迎えます。」という立派な歓迎のあいさつであった。続いてジャンヤンミ副大臣の祝辞、農林部次官のあいさつした後、熱気につつまれた開会式はすべて終了したのである。大変感動したすばらしい開会式だ

ったが、残念に思った事は、段上に設けられた来賓席の空席が多いのが気になった。APIMONDIA が責任をもって参加各国の代表を登壇させるような配慮がほしかったと思うと同時に、アジアからの参加国も数多くあったのだから、中国もその辺の配慮をされたらもっとすばらしい開会式になったと思われた。今後ますます APIMONDIA への出席国が増える事を想定する時、世界共通語での同時通訳の施設などがあつたらなおよかったと思った。閉会后休憩をはさんで中国蜜蜂研究所長の報告が始められた。

(〒101 千代田区神田駿河台 1 の 2

(社) 日本養蜂はちみつ協会副会長 柳下重幸)

中国養蜂の波紋と APIMONDIA

本来ならば第 34 回ということになるが、ユーゴスラビアに起った内戦が終息せず 4 年ぶりの開催となった。私にとっては 5 度目の大会参加であるが、正直言って気乗りのしない参加となった。理由は簡単明瞭である。この国の養蜂生産物が、世界の養蜂の発展に多大の影響を及ぼし、価格を抑え、養蜂家の生産意欲を奪い、未来さえも奪わんとしているからである。

日本の養蜂家で、純粋に養蜂のみで企業経営をされている方が、いか程おられるのだろうか甚だ疑問である。必死になって努力はするものの、Have you a good business? Yes, I have. と答えられる養蜂家が、日本はおろか世界に、おられるとは思えないのである。機会がある度に私が尋ねた人々は、皆、顔を曇らせ首を横にふる人ばかりであった。その理由として輸入品の安さをあげていた。いみじくも開会式の翌日、人民日報海外版は、次のように報道していた。

「北京で開催されている第 33 回国際養蜂会議の報告によれば、現在中国は世界一の養蜂生産大国となっている。中国の蜜蜂飼育群数は 700 万群以上に達し、ハチミツ生産量は 20 万 t 以上、ローヤルゼリー・花粉は 1000t 以上に達している。蜂蜜、ローヤルゼリーは生産量及び輸出量において世界一である。……」

上述の記事は、誇大表現ではない。中国が蜂蜜、ローヤルゼリーなどの養蜂生産物を世界中に輸出し、世界中の養蜂家に影響を及ぼしている様は日本が工業製品を湯水の如く輸出し、外貨をかき集め、集中批判を浴びているのと類似している。しかし、私達養蜂界においては 30 年も前に自由化は実施されており、その批判は当を得ていない。国産品に見切りをつけ、いち早く輸入品に依存された企業にとって、中国はなくてはならない存在であるが、現在の輸入比率は余りに片寄っていて危険とも言える。

ここで注目しなければならないことは、中国の養蜂家が、極めて裕福で、世界中の同業者が羨む程、素晴らしい生活をしているかどうかである。裕福でなければ嘘ではないか。しかし、この点についての答えは「否」である。

私が出会った養蜂家には、それを感じさせる何もものを持ち合せてはいなかった。否、貧しかったとも云えるのである。不思議である。

世界中の養蜂家を貧困と失望に追い込みつつある(失言かも知れないが、20 年近くも価格が変わらず高齢であるが故に転職もできず、後継者もなく廃業を余儀なくされている多くの養蜂家を知るにつけ、あえて言わせていただく)中国の責任は極めて重いものがある。

APIMONDIA には 7 つの部会がある。その中の養蜂経済部門は、こうした意味でも重要な役割を果たしてくれるのではと考える。世界を見ず、日本を見ず、各々が気ままに行動した結果が、今問われているのである。日本の総意をとりまとめる機関の必要性を痛感した。日本の渡辺英男氏が、今回はじめて APIMONDIA 常任委員会養蜂経済分科会代表に選出されたのは、意義深いことである。しかし、氏に期待する前に、氏を充分支援してあげることが最も大事なことであろう。

最近の APIMONDIA は正に商業主義先行型で、望ましい状態ではない。APIMONDIA は、ミツバチを愛する人々の祭典として末永くありたいものである。

(〒463 名古屋守山区小幡北山 2773-160

(株) 養蜂研究所 井上凱夫)

会議場にて

3年ぶりの中国である。北京空港は以前より照明が明るくなってはいたが少しは緊張する。空港から北京市内へは高速道路が開通したばかりで半分位の時間で到着した。便利になったものだ。しかし、一般道路では、3年前と変わらない光景がここに見られた。ロバの荷車、自転車の数であった。市内は車の洪水である。以前に比べると2~3倍に増えている。そのためかいたるところで渋滞している。だれかが言っていたように、遠くから見ると素晴らしく大きく綺麗な町だが近づいて見ると、まだまだと言うのが実情のようである。

アピモンディアでは日本の発表は5題であった。青森ヒバ油のチョーク病や、ダニに対する有効性について渡辺氏が発表され、3題は玉川大学の酒井先生、松香先生グループの日本ミツバチの習性などについての研究発表であった。私の発表内容はローヤルゼリー中の抗糖尿病因子についてであり、デセン酸などの脂肪酸にその作用を見出だしたというものである。学会の発表内容は養蜂関連の物が多く、薬理作用に関するものは少なかった。その中でとくに私の興味を引いたものはローヤルゼリー関連では中国のYuan氏らのSOD作用、Xu氏らのデセン酸による抗放射線障害活性、プロポリスではキューバのGiral氏らの抗消化性潰瘍作用くらいであった。

アピエキスポ(展示会)では世界各国から全部で100位の展示があり(図2)、日本からは秋田屋とアピの2社だけであった。特に日本のブースには養蜂器具や各種蜂産品および、パッケージデザインなどに相当な関心を持たれたようで、空箱でもいいからくれなにかと言う申し込みが多かった。燻煙器や蜜刀などの養蜂器具については、これはいくらか? 売ってくれないか? などと言う申し込みが多かったが、日本での販売価格を伝えると彼らは首を横に振って諦めるほかになく、改めて、日本の物価は世界一? を認識せざるを得なかった。アピの展示品の中で取り分け人気の高かったものは赤、黄、青、ピンク4種類のモールでできたミツバ



図2 APIEXPO会場

チのおもちゃである。これは去年の第一回アジア養蜂会議においても展示会場を賑わせた物である。確かに小さくて可愛いものではあるが凄く人気であった。150個持っていったがその10倍持っていたとしても不足したであろう。

他のブースではハチミツ、ローヤルゼリー、花粉の製品が主でその他、各純度のデセン酸、蜂毒などが展示されていた。養蜂生産物以外ではローヤルゼリー多収穫器(女王蜂が卵を生み付ける確率は95%以上とのこと。そのため、中国のローヤルゼリー年間生産量が1000t近い訳だと納得した)、プロポリス多収穫器、ハチミツ中のジアスターゼ活性を自動的に測定する機器、アピスタンなどの殺ダニ剤、ハチミツ濃縮器などが展示されていた。これらは全部外国産の物かと思ったら大間違いで、例えばセキスイ、ミツピシなどの名前がパンフレットに見え隠れしている。養蜂器具もしかりである。流れとして、木製よりも、プラスチック製になりつつある。ヨーロッパもほとんどプラスチック製でスイス、イギリスの養蜂家たち曰く、No problem. スイスの養蜂家たちは次ぎのアピモンディアでは家にとまれと言ってくれる始末。日本の養蜂家の方も明るく良い人ばかりで、ミツバチは人の心も豊かにするのかなあと感じなくなってしまった。

今回の会議では非常にたくさんの人々と会い、情報を交換する事ができ、多くの事を学ぶ事ができたため、非常に楽しい思い出となった。次回のローザンヌでも良い思い出を作りたいと思っている。そのためには、積極的に話し

かけなければならない。重要なポイントはただそれだけであるとする。

(〒500 岐阜市加納桜田町 1-1

アピ (株) 総合研究所 鷺野憲之)

APIMONDIA に参加して

日本で消費される、ハチミツ、ローヤルゼリーなどの大部分は中国からの輸入品である。今回の会議は中国養蜂の実状を視察する好機であったが、残念ながらそのような企画はなく、片鱗を見るに止まった。

博覧会の展示コーナーには、広大な中国の多数の省県からの出品物が並んだ。蜂蜜、花粉、ローヤルゼリーなど、これらと漢方薬アルコールエキス等を加味した健康食品、飲料が主で見本市風の傾向があった。養蜂経営の観点から見ると、もっともな結果とも考えられる。蜂蜜天日濃縮器という、アルミ製の大型箱があった。中国養蜂の一面を示す器具と見た。中国各地の養蜂の特性や、古代中国からの養蜂の歴史を語る蜂具や資料を見る期待は外れた。これらは、数多い出版物の中に見られるのであろう。

北京の養蜂生産物工場の倉庫で、膨大な量のドラムカンの集積を見た。錆びた古いカンもあった。日本の輸入蜂蜜の数量が4万数千tともなれば、これを私ども日本人の食卓に身近な風景と見るのもやむをえまい。

国立中央蜜蜂研究所で、ローヤルゼリー採取の実況を見学した。4列120個の王台の約7割が活着と見えた。王台に女王蜂が直接産卵し、蜂児移植の作業を省略する装置があった。

巣箱は2列あって、その1列で面布をつけない参観者が巣箱を開けて巣板を引き上げていた。巣箱列の中央に糖液らしいびんがあり、そこからビニールパイプが各箱に入っていた。他の一列で、面布をつけた所員が王台枠をとりだしていた。中国の蜂は温和しいという伝説と、中国の人の心遣いがわかる情景であった。

構内に、養蜂博物館という建物があり、中には紀元前6世紀の古拙な拓本があり、蜂毒をもってリュウマチを治療するとの記載が見られた。そのほかにも蜜蜂賦、養蜂歌等の古詩、古



図3 道端のハチミツ売りの親子

文、古画が並んで、去り難い思いがした。

万里の長城への道端で、二m四方足らずの小さなテントに鍋釜寝具を備えた養蜂家の家族に会った。巣箱は30~40箱、道行く人に商うのか、小さな箱のうえに水ビンに入れたハチミツが5本、花粉が5本並べてあった(図3)。

西安城壁西門の窓から、遠くシルクロードへの路が黄砂に煙っていた。西安郊外の路端では、20余りの巣箱が埃をかぶって並んでいた。

北京と西安で見た蜂はすべて洋蜂であったので、中国蜂(東洋種)に会える雲南に期待をした。雲南省昆明市は沖縄と同緯度であるが、海拔が1900mであるため、四季温暖で花が絶えず、年中採蜜が可能であるという。

中国全土で養蜂戸数20万戸、800万群のミツバチがあり、そのうち中国蜂300万群。雲南には、21の少数民族が各地に住んで、中国蜂を飼っており、その数は100万群。各民族に独自の養蜂文化があるという。産蜜量は、もとは1群1kgであったが、今は平均20kgに達し、87kgの記録があるという。雲南農業大学、雲南農業科学院が現地に指導者を派遣し、蜂種改良、飼育法改善に務めた結果ということである。

この地には、サバミツバチ以外のアジアミツバチ5種が住む。トウヨウミツバチ3亜種を含んでいるということである。

雲南での見聞は、昆明の大学、研究所訪問で得られたもので、玉川大学のご盡力による。旅行の全日程が日々楽しく実り多かったことは同行の皆様方のおかげと感謝し、特記しておく。

(〒611 宇治市木幡松尾13-8 野口耕司)